美作大学・美作大学短期大学部紀要
2013, Vol. 58. 47〜53

論　文

現代米国読解指導法に関する一考察
－ ピアソン P. David Pearson を中心として －

A consideration of contemporary reading comprehension instruction method in the United States with a Focus on P. David Pearson

中　野　和　光

キーワード：読解指導法、読解過程、読解指導モデル、シェーマ理論

1．はじめに

学校教育のあるところ、読解は常に求められる。米国においても同様で、植民地時代からの読むことの教育の歴史の中で、読解そのものは求められてきた。しかし、読解が重視されてきたかというと、必ずしもそうではなく、読解が研究の対象として認められるようになるのは20世紀になってからである[(1)]。読解指導の実践が研究と理論にもとづいて行われるようになるのは、1980年代以降である[(2)]。本稿は、1980年代以降の読解指導研究の中心にいるピアソン P. David Pearson を中心にして、現代米国の読解指導法について検討を行うことを目的とする。

2．ピアソンについて

1976年､連邦政府の資金によって､イリノイ大学に、「読むことの研究センター」が設置された。このセンターは、認知心理学に基づく読むことの研究の中心となって大きな影響力を持った。ピアソンは、そのセンターの研究の中心人物である。ピアソンは、ジョンソン D.D. Johnson とともに、1978年に『読解指導』[(3)]という書物を出版し、1984年に､『読むことの研究ハンドブック』第１巻[(4)]を編集している。このハンドブックは、1991年に第２巻、2000年に第３巻、2011年に第４巻を出版している。ピアソンはそのいずれの編集にも中心的な役割をになっている。

3．米国の読解指導の歴史

米国の読解指導の歴史を研究した文献は、スミス Nila B. Smith の『アメリカの読むことの教育』[(5)]、ロビンソン H. Alan Robinson らの『読解指導　1783〜1987』[(6)]、モナハン E. Jennifer Monaghan らの『過去を書く：植民地時代アメリカと合衆国における読むことの教授－1640〜1940－』[(7)]とピアソンの一連の論文[(8)]が主要なものである。スミスのものは、植民地時代から1965年までの読むことの教育の動機、目的、教材、方法を取り扱っている。時期区分は、1607〜1776、1776〜1840、1840〜1890、1890〜1910、1910〜1935、1935〜1965である。ロビンソンらのものは、読解過程と読解指導法を対象としている。時期区分は、1783〜1826、1826〜1882、1883〜1910、1910〜1987、となっている。それぞれの時代の支配的な指導モデルを記述している。モナハンらのものは、時期区分は、1640〜1826、1826〜1883、1883〜1925、1914〜1940で、各時代に使用された読本の内容と指導法を記述している。ピアソンのものは、1970年代半ばからの読解過程の捉え方と読解指導法の大きな変化を中心にしたものである。ここでは、これらの文献を中心にして、検討してみたい。

(1) 植民地時代

ホーンブック、読本（『ニュー・イングランド・プライマー』など)、詩篇、聖書を読む対象として、ア

ルファーベット法と呼ばれる方法で教えた。子どもたちは、3歳になると、綴りを声を出して読んだ。ペンを持って文字を書くのは7歳からだった。アルファベットの文字を声を出して読み、次に、音節ごとにつづり、8音節まで 続けた。読むことは音読を意味していた。1820年ごろまでは、読むことの指導はもっぱらアルファーベット法が用いられた[9]。

(2) 独立後から1890年頃まで

独立後、愛国心と道徳を強調した『ノア・ウエブスター』などの読本を用いて、正しく発音し、正しい強調と抑揚をつけて、ゆっくりと注意深く読むことが求められた。

1840〜1850年頃になると、アルファーベット法に対する反対が起こった。背景には、ペスタロッチ法の影響があった。単語を分析する前に、単語を全体として見ること、発音を聞くこと、説明された意味を理解して、その単語を構成している文字の学習をさせる単語法と、声を出して読むこと、正しく発音すること、間をとることを強調したアルファーベット－音声法が人気を集めた。アルファーベット法は、1870年ごろまで実践された。

単語法から発展した文章法、物語法が用いられるようになった。アルファーベット－音声法もより洗練されて行われるようになった[10]。

読解過程から見ると、初期の時代は、最初に綴字、発音、定義に習熟し、次にテキストの暗誦に進み、最後にテキストの音読を行った。19世紀の半ばになると、最初に、機械的に読み、次に、知的に意味のために読み、最後に、レトリック的に読んだ（表現読み）。あるいは、これらの読み方を結合させて読んだ[11]。正確に流暢に話すことが重視され、読解は、テキストの記憶、雄弁といったより価値あるとされるものへの一ステップと考えられていた[12]。

(3) 1890年頃から1935年頃まで

1918〜1925年ごろ、黙読が普及した。教育全般において意味に注意が向けられるようになったことが背景にあった。黙読の指導において、読解が意識されるようになった[13]。

この時代、読むことの教育の目標が幅広く捉えられるようになった。活動カリキュラムと結合して読むことの指導が行われるようになった[14]。

読解過程から見ると、テキストの知覚から始まり、単語の連合、考えの関連付け、思想の獲得へと進んだ。この時期になると、記憶とレトリック的伝達が重視されなくなり、黙読を通した思想の獲得が重視されるようになった。背景には、読むことは思想の獲得であるといったパーカー Francis W. Parker らの進歩主義教育の影響があった[15]。

(4) 1935年頃から1970年頃まで

ピアソンによれば、読解が読む能力の指標となるのは、20世紀になってからである。それまでは、読解全体の問題を取り扱った教育者はほとんどいなかった。いくつかの重要な変化が現れた。一つは、紙と鉛筆を用いたテストが行われるようになったことである。もう一つは黙読である。読むことの指導は意味の重視へと移行した。読解指導は、テキストについての生徒に質問することからなっていた。生徒がながく答えることができればよく理解していると考えられていた。読本の出版社は、巻末の質問だけでは十分ではないと考え、ワークブックを作成して、問いの数を増やした。読解の複雑な過程は、スキルに分解された[16]。

基本的読解プログラムにもとづく読解スキルの指導が行われるようになった。

読むという行為は、読解スキルの合成物であると考えられた[17]。

読解過程と読解指導は、1970年代半ばを境として大きく変化した。

1960年代半ばにおいて、読むことは文字を音に翻訳することであると考えられていた。読解とは、書かれたものの理解は、読み手によって生み出されたスピーチの理解以上のものではなかった。話し言葉と書き言葉の違いはなかった。読むことは言語過程とはみなされなかった。それは、知覚過程とみなされていた[18]。

4．1970年代以降の読解過程の理論

1970年代に入って、読解指導は、心理言語学、言語学、認知心理学、社会言語学、等の影響を受けた。

認知心理学にもとづく読解過程の理解は次のようなものであった。

- 学習は学習者の言語発達の状態にもとづく。
- 学習者は意味を構築する。
- 学習者を活性化する学習が強調される。
- 動機は自己主導的である。
- 学習は学習者によって主導される。
- 学習者はメタ認知的媒介を強調する。
- 学習は全体的でパタン化している。
- 学習は問題解決的である。
- 効果的な読解は学習を先行知識と経験と関連付けることである[19]。

認知心理学にもとづくこのような読解過程の理解を受けて、読解過程についてシェーマ理論という新しい理論が提案された。

シェーマとは、経験に由来する考えを入れる器（container）である。たとえば、われわれは、椅子をみて、その視覚経験を「椅子のシェーマ」の中に貯える。同様に、レストランに行って、レストランのシェーマを貯える。パーティに行ってパーティのシェーマを貯える[20]。

シェーマ理論を使って、読解過程を説明すれば、次のようになる。

読むことは、既有の知識とテキストの中で出会った新しい情報とを結合することによる意味を構成する能動的な過程である。読み手は、一連の繰り返される相互作用の中で意味を構築する。各相互作用の中で、読み手は、テキストの中で認識されたデータにもっとも適合している思われるモデルを生成する。新しいテキストデータは、そのモデルの十分さを再考慮させることを誘う。徐々に、繰り返しながら、読み手は、自分自身の意味を構成する。その意味は、著者が描いていた意味と似ているかもしれないが、同じではない。読み手は、正確に同じモデルを構築することはない[21]。読解は、テキストと読み手と文脈の交叉する所でおこる[22]。読解の過程は、テキストを知覚し、話し言葉の何らかの等価物に置き換え（decoding）、語彙、文章、文節を理解し、全体のテキストの理解をする過程である[23]。

全体のテキストを理解した状態とは、テキストのさまざまな部分の間とそれらの部分と読み手の既有の知識や経験との間の関係を確認した状態である[24]。

5．読解指導法

読解過程のこのような捉え方に基づいて、ピアソンらは、考え深い熟達した読み手の次のようなモデルを提案する。

1．思慮深い読み手は、既有の知識を使って、テキストの意味を構成する。
2．思慮深い読み手は、読解過程を通して、自分の理解をモニターする。
3．思慮深い読み手は、テキストの中の重要なことを決定することができる。
4．思慮深い読み手は、読んでいるとき、情報を総合する。
5．思慮深い読み手は、読んでいることの十分な統合された理解をするために読んでいるときと読んだ後、たえず推理する。
6．思慮深い読み手は、意識的に、あるいは、無意識的に、自分自身と著者とテキストについて問いを発する[25]。

ピアソンによれば、読解のカリキュラムは、このような熟達した読み手が用いるこれらのストラテジーによって構成されるべきである[26]。

ピアソンは、スキルとストラテジーを次のように区別している。

1．ストラテジーは、読み手のコントロールのもとでの意識的な計画を強調する。
　スキルは、意識的な計画なしで用いられる。
2．ストラテジーは、読み手がテキストを理解するときに通過する推理過程を強調する。
　スキルは、このような自覚をすることは稀である。

3．ストラテジーは、異なった種類のテキストを読むときや、異なった目的で読むときは変化する。スキルは、自動的で一貫した不変の行動である[27]。

読解指導のモデルとして、ピアソンは次のことを提案している。

1．ストラテジーの明白な記述
2．ストラテジーの実際のモデル化
3．ストラテジーの共同の使用
4．責任を徐々に生徒に委譲するストラテジーの共同の実践
5．ストラテジーの独立した使用[28]

これらを図解すると、図1[29]のようになる。

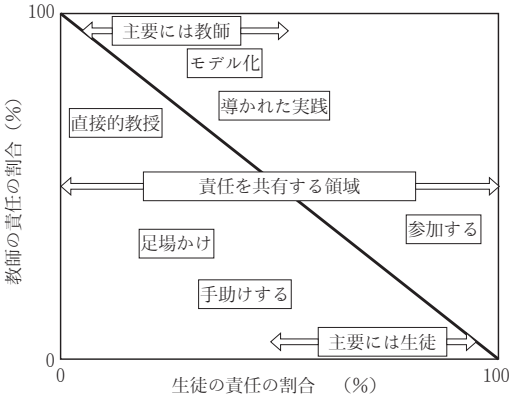

図1　読解指導の責任委譲モデル

ピアソンらは、小学校低学年の読解指導について、次のことを勧めている。

勧告1：生徒に読解ストラテジーの用い方を教える。
①読解のストラテジーの使用の仕方を教える。
読解のストラテジーの例は、次のようなものである。
既有知識の活性化、予測
質問する
視覚化する
モニターする、明確化する
推理する
要約する
②読解のストラテジーを単独または組み合わせて使用する。
③責任を徐々に生徒に委譲しながら教える

勧告2：生徒に、テキストの組織的な構造を確認して使用するように教える。
勧告3：テキストの意味について、焦点化された高度な討論によって生徒を導く。
勧告4：読解の形成を支援するように、目的的にテキストを選ぶ。
勧告5：読解を教えるのにふさわしい文脈を確立する[30]。

ピアソンらの読解指導法を検討してみると、次のような特徴があることに気づかされる。

1．それは、明示的な読解教授法である。

ピアソンらがシェーマ理論を提案した同じ時代の全体言語の指導と比較してみよう。

グッドマン Kenneth Goodman は、全体言語の読むことと書くことの指導の特徴を次のように述べている。「もし、人々が、言語を使うことを学習しながら、言語を学習するなら、言語のカリキュラムは、読むことと書くことを含んでいる。これらの言語過程は、カリキュラムの残り―理科、社会科、数学、美術―と統合されなければならない。探究学習、問題解決、プロジェクト、これらすべては、話し言葉の活動だけではなく、真正の読むこと書くことを含んでいる。」[31] ピアソンの読解指導法を全体言語と比較してみると、明らかにピアソンの読解指導法は、明示的な読解指導を目指している。

2．ストラテジーの教授を中心としている。

前の時代の読解指導がスキル中心であったのに対し、ピアソンの読解指導法は、意識的な計画と推理過程を強調するストラテジーを中心としている。

3．明確な指導モデルを持っている。

ピアソンの読解指導は、教師によるモデル化、導かれた実践、生徒による独立した実践からなる明確な指導モデルを持っている。

4．読むことと書くこととを類似の過程とみなし、結

合する傾向がある。

ピアソンの読解指導モデルは、生徒による独立した読解の実践を志向しているが、教師によるモデル化をモデル文の提示とし、そのモデル文の特徴についての討論、その上でそのジャンルの文章を書かせれば、作文指導法のモデルとしても用いうる。ピアソンは、1983年に、「読むことの構成的モデルのために」という論文の中で、読むことと書くことは、本質的に、計画―草稿―調整―修正―モニター、という構成の過程である、と述べている[32]。1985年の論文では、「読解指導と作文指導はもはや分けられないだろう」[33]と述べている。

6．おわりに

20世紀末から、読解指導と作文指導に大きな変化が現れ始めている。一つは、読み書きという言葉に代わって、リテラシーという概念が一般的に使われるようになり、twitter、blog、SNSなどの新しいジャンルを含んだリテラシーが新しいリテラシーと呼ばれるようになったこと、もう一つは、リテラシーを読むこと、書くことに関わる独立したスキルととらえるのではなく、多様に存在する社会的文化的実践としてとらえるニュー・リテラシー・スタディーズが勃興したことである。このようなリテラシーのとらえ方の変化の結果、リテラシーの指導には、次のような大きな変化が現れている。

(1) 多様なジャンルのテキストの読解と作文の指導が行われ始めている。たとえば、電子的テキスト、製品の説明書、歴史フィクション、科学フィクション、数学的テキスト、科学実験のテキスト、などである。

(2) 読む力と書く力をそれ自体独立したスキルとして指導するのではなく、目的と意図のある社会的文化的実践の中で育てようとしている。

このような読解指導の動きを前にして、ピアソンの読解指導は、影が薄くなったのかというとそうではないように思われる。たとえば、今日のリテラシーの指導の動きを反映したモス Barbara Moss らの『4～6学年における新しいリテラシーの教授』[34]という書物の中の説得文の指導は、ピアソンの責任委譲モデルを使って、モデル文も示し、その特徴を理解した上で、説得文の作文をさせている。今日の読解指導、作文指導はジャンルを強調しているが、ジャンルの知識は、既有知識の一つと考えれば、ジャンルに関する知識はシェーマの一部である。また、今日の読解指導、作文指導は、目的と意図のある社会的文化的実践の中でリテラシーを育てようとする傾向にあるが、読解と作文の目的、意図、立場は、読み手、書き手の既有知識と経験から生まれる。また、社会的文化的に意味のあるリテラシーの実践を行おうとすれば、文脈が理解されなければならないが、読解は読み手とテキストと文脈が交叉したところに起こると述べたのはピアソンである。こうした意味で、今日の読解指導の基礎に、ピアソンの読解指導の理論があるように思われる。

引用文献

(1) P. David Pearson, The Roots of Reading Comprehension, in Susan E. Israel and Gerald G. Duffy ed., Handbook of Research on Reading Comprehension, Routledge, 2009, p.4.

(2) Ibid., p.3.

(3) P. David Pearson and Dale D. Johnson, Teaching Reading Comprehension, Holt, Rinehart and Winston, 1978.

(4) P. David Pearson, Rebecca Barr, Michael L. Kamil and Peter Mosenthal ed., Handbook of Reading Research, Longman, 1984.

(5) Nila Banton Smith, American Reading Instruction, International Reading Association, 2002（1965）.

(6) H. Alan Robinson et al, Reading Comprehension Instruction, 1783～1987, International Reading Association, 1990.

(7) E. Jennifer Monaghan and Arlene L. Barry,

Writing the Past: Teaching Reading in Colonial America and the United States, 1640～1940, International Reading Association, 1999.

(8) P. David Pearson and Diane Stephens, Learning about Literacy: a 30 Year Journey, in Robert Ruddell et al, Theoretical Models and Process of Reading, International Reading Association, 1994, pp.22～47. P. David Pearson, Changing Face of Reading Comprehension Instruction, in Richard D. Robinson, Readings in Reading Instruction: Its History, Theory, and Development, Pearson Education, 2005, pp.100～112. P. David Pearson, The Roots of Reading Comprehension, op. cited. P. David Pearson, Reading in the Twentieth Century, in Jeanne B. Cobb and Mary K. Kallus ed., Historical, Theoretical, and Sociological Foundations of Reading in the United States, Pearson Education, 2011, pp.13～60.

この他に、May Jo Fresch ed., An Essential History of Current Reading Practices, International Reading Association, 2008. Kathy Ganske and Douglas Fisher ed., Comprehension Across the Curriculum: Perspective and Practices K-12, The Guilford Press, 2010.を参照した。

(9) E. Jennifer Monagher, Writing the Past, op. cited, pp.5～6.

(10) Nila Banton Smith, op. cited, pp.33～68.

(11) H. Alan Robinson et al, op. cited, pp.11～65.

(12) P. David Pearson, The Roots of Reading Comprehension, op. cited, pp.4～5.

(13) Nila Banton Smith, op. cited, pp.149～150.

(14) Ibid., pp.227～230.

(15) H. Alan Robinson et al, op. cited, pp.48～49.

(16) P. David Pearson and Jennifer A. Dole, Explicit Comprehension Instruction, A Review of Research and a New Conceptualization of Instruction, Technical Report no.417, Center for the Study of Reading, University of Illinois at Urbana- Champaigne, 1988, pp.2～3.

(17) Nila Banton Smith, op. cited, pp.22～23.

(18) P. David Pearson and Diane Stephens, Learning about Literacy, op. cited, pp.22～23.

(19) Reading, in Theodore L. Harris and Richard E. Hodges ed., The Dictionary of Literacy, International Reading Association, 1995, p.207.

(20) P. David Pearson, The Roots of Reading Comprehension, op, cited, p.13.

(21) P. David Pearson, L. Roehler, Janice A. Dole and G. G. Duffy, Developing Expertise in Reading Comprehension, in S. Jay Samuels and Alan E. Farsrup ed., What Research Has to Say about Reading Instruction, International Reading Association, 1992, pp.148～153.

(22) P. David Pearson, The Roots of Reading Comprehension, op. cited, p.14.

(23) Robert Calfee, Marcia Henry, and Jean Funderburg, A Model for School Change, in S. Jay Samuels and P. David Pearson ed., Changing School Reading Program, International Reading Association, 1988, pp.121～142.

(24) Paul van den Broek et al, Assessment of Comprehension Abilities in Young Children, in S. Stahl and S. Parris ed., Children's Reading Comprehension and Assessment, Erlbaum, 2005, pp.107～130.

(25) P. David Pearson et al, Developing Expertise, op. cited, pp.153～168.

(26) Ibid, p.168.

(27) Ibid, p. 169.

(28) Nell K. Duke and P. David Pearson, Effective Practices for Developing Reading Comprehension, International Reading Association, 2002, pp.208～210.

(29) Ibid, p.210.

(30) Improving Reading Comprehension in Kindergarten through 3rd Grade, Sep. 2010, Institute of Education Science, National Center for Educational Evaluation and Regional Assistance, NCEE 2010～4038, U.S. Department of Education.

(31) Kenneth Goodman, Whole Language, in Barbara Guzzetti ed., Literacy in America- An Encyclopedia of History, and Theory-, ABC-CLIO, vol.2, p.675.

(32) Robert J. Tierney and P. David Pearson, Toward a Composing Model of Reading, Reading Education Report no.43, Center for the Study of Reading, University of Illinois at Urbana-Champaign, 1983, pp.1～26.

(33) P. David Pearson, Changing the Face of Reading Comprehension Instruction, op. cited, p. 111.

(34) Barbara Moss and Diane Lapp ed., Teaching New Literacies in Grades 4-6, The Guilford Press, 2010.